

サセックス・ダウズメン協会(The Society of Sussex Downsmen)の活動：1932-1939

坂梨健史郎

はじめに

イングランド南部に位置するサウス・ダウズ (the South Downs) は、東はイースト・サセックス州から西はハンプシャー州にまで続く長大な丘陵地帯であり、それはロンドンを含むイングランド南部の多くの人々に今日まで愛されてきた。それは牧草地として機能しただけでなく、人々に散策と眺望の場を与え、その景観はイングランド南部の、時にはイングランド全体の自然のシンボリック的存在となってきた¹。

そのサウス・ダウズのサセックス州内での景観保全やそのほか通行権等の保護を主な活動目的とする団体がサセックス・ダウズメン協会 (The Society of Sussex Downsmen, 以下「SSD」とする) である。この非営利組織は1924年、サセックス在住の文人アーサー・ベケット Arthur Beckett を会長として、サセックス州およびロンドン在住の名士によって結成された。この非営利組織は今日でも活発な活動を続けているが、本稿は1932年から1939年にかけての活動状況について概観するものである²。

1933年9月22日の評議会において、ショーラム U.D. Council からの書簡が紹介された。内容は、同地域における通行権道 (rights of way) のすべてをまとめる作業に協力してほしいという依頼であった。

また翌月の10月21日の評議会においては SSD 会長がクローリンクにおける記念プレートが公式な儀式無しに設置されたと報告した。

また同評議会において、サー・ローレンス・チャブからの書簡が読み上げられた。内容は、「コモンズ・アンド・フットパス協会」の評議会に SSD が代表を派遣することを要請する物だった。議長のペイトリー大佐が可能な限り出席することを快諾している。また、「歩行者協会」からも同様の要請が来ていることが報告された。この件についても議長が可能な限

り出席することを承諾した。

さらに「イースト・サセックス・ルーラル・コミュニティ・カウンシル」からの書簡も紹介された。SSDに対して雑誌『カントリーマン』の東サセックス版への寄稿を依頼する物であったが、SSDとしては関心を表明しないことが決められた。

次に議長は、イーストボーンのダウンランドの保全のありかたを協議する目的で同年9月に招集された会議にベケット会長、サー・ローレンス・チャブ、ベイトリー大佐および数人が出席したことを報告し、サー・ローレンス・チャブが地元諸当局の一致した行動を目的とする計画を提出したことを合わせて報告した。

一方、通行権法案が新年にも議会に提出されることに鑑みて、「コモンズ・アンド・フットパス協会」の書記長がSSDの監視下にあるすべてのフットパスや馬道等、またすべての門扉や障害物の調査を実施することを提案してきたことが報告された。ベケット会長は、イーストボーン地域についてはすでにある人物をその任務につかせていると述べた。評議会はこれを受けて、サー・ローレンス・チャブ作成の通行権法に関するパンフレットをすべての地域責任者（District Officers）に配布することを決定した。

また、サー・ローレンス・チャブから、ファルマー—パルマー間のフットパスに「私有地」という看板が出ていることに関して苦情を申し立てられている、この看板は数年前に陸軍の演習が実施された際に農家の保護目的で立てられた物だという説明を述べた。

最後に書記長からの報告があり、SSDのランプリング・セクションはいまや存在せず、このかつては活発だった活動を復活させるため、すべてのウォーキングのメンバー（78人）が活動復活の可能性を議論するための会合に参加するよう促す文書を回覧したが、返事が来たのは5人であったと述べた。よってSSDのこのセクションは活動終了とすることが決定された。

1934年2月の評議会において、「サウス・ダウズ保全のためのイースト・サセックス州議会法案」について、もしそれが昨今新聞紙上で示唆されたとおりであるならばSSDが強力に支援すべきであると議長が提案した。この件については緊急委員会の手ゆだねるべく合意がなされた。

翌年1935年5月の評議会においては、「イングランド田園保護協会（Council for the Preservation of Rural England, 以下CPRE）」書記長からの提案が紹介された。その内容は、SSDの地域責任者の仕事をCPREの「田

園監視人country-side wardens」と協同で行うという物であった。評議会ではこの提案を審議した結果、SSDの地域責任者のシステムはこれまでのところ上手くいっているとして、CPREの助力は不要であるとの結論に達し、書記長はその旨返答することになった。

また同評議会では、カーネギー・トラストに対して寄付を依頼する件に関して書記長より提案がなされ、同意された。

同年10月12日の評議会では、ベケット会長はクロウリンク・エステイトのフットパスが耕され、そのことが同地の海岸線の崩壊につながっていることに言及した。農家がナショナル・トラストから土地を賃借したものである。しかしこの件に関する行動は当分の間延期された。

次に議長は、ある農家がファルマー—ルイス間のダウンランドのダウンズ農場の大区画をある建設シンジケートに売却する申請をしたため、それに反対する会合に出席したことを報告した。議長によれば、同席の保健省の監査官は反対を却下して申請を認可した。

同評議会ではさらにSSD自身のトラスト設立について討議された。クック会員が、いわゆるサセックス・トラスト、すなわちSSDのために不動産を保有する団体の設立の可能性について調査した結果を報告している。クックはそのような団体の設立には50ポンドかかるだろうという見通しを示した。議長はこれを受けて、SSDがこの件で動くべき時が到来したと述べ、仮に一定数の会員が各自1ポンドを拠出できるのならばトラストの設立は可能だろうという見解を述べた。討議の結果、小委員会を設置することで合意に達した。

ブラマー城が売りに出ているという公告があり、12エーカーのフリーホールドで価格は2450ポンド。建設会社が住宅建設のためにこの土地を狙っているのは周知の事実であり、城の一部の破壊は切迫していた。議長はサー・ローレンス・チャブとの会談を報告した。そのなかで、議長はチャブに、この城が「古代記念物」に指定されたということの正確な意味を尋ねた。要は、破壊する前に3ヶ月の告知期間が義務付けられているというだけのことである。この重要な案件は現在提案されているサセックス・トラストの核心部分であるので、この問題をルイスでの討論に持ち出すこととなった。

また同評議会では、ナショナル・トラストからの依頼についても審議された。同トラスト(原文では"the Nation")にレイディ・バクストンから

最近寄贈された地所であるニューティンバー・ヒルについて、それを管理する地元の委員会に代表を派遣して欲しいという依頼である。評議会ではベイトリー大佐がその任につくことを希望するレイディ・バクストンからの書簡が読み上げられ、ベイトリーが申し出を受け入れて管理委員会のメンバーとなることで了承された。

その翌月の1935年11月23日の評議会では、上記の件でナショナル・トラストがベイトリー大佐の管理委員会入りを認めたことが報告された。

サセックス・トラストに関して、定款の写しをナショナル・トラストおよびサセックス考古学協会に対し「礼儀のしるしとして」総会の日付の通知とともに送付することをタラントが提案し、了承された。

トラストの名称は最終的に「サウス・ダウンズ保全トラスト South Downs Preservation Trust」に決定し、同年12月10日には上記の件で特別総会が開かれた。総会においてベイトリー大佐は、土地や投資物を保有できるようにするために準備が必要であるという結論にSSDの評議会が達した理由を説明し、下記の決議を提案した。

「サセックス・ダウンズメン協会の今次会合は、ダウンランド保全に関わる現在の状況に危機感を抱き、よって信託された土地を保全のため保有し、ならびに投資物件を維持のため保有するという目的のため、評議会に1929年会社法に則って担保付有限信託会社の登録を進める権限を与え、さらに、右登録手続き費用の支払いのため50ポンドを超えない額を協会の基金より拠出することを右評議会に許可する」

クックは会員の質問に対して、「サセックス・トラスト」は信託会社としてふさわしい名称として実際に検討されたが、商務省に非公式の照会をした結果、類似の名称を持つサセックス内の既存のトラストとの間で混乱が生じるかもしれないことに鑑みて、異なる名称を採用することになったと説明した。

同決議案は全会一致で採択された。

翌1936年4月18日の評議会において、ラストイントンのピンチョン夫人よりの書簡が読み上げられた。隣接のキャンプ場からの迷惑行為の結果、この地域を離れるという通知であり、終身会費として3ポンド3シリングが同封してあった。

その一週間後に開催された年次総会では、会計担当者は会費や寄付からの収入が「非常に満足すべき」上昇を遂げたとし、SSDはかつてないほど

良好な財務状況にあると述べている。

同年10月の評議会では、国王ジョージ六世の戴冠を記念してサセックス内の丘に植樹をすることを提案した『ウエスト・サセックス・ガゼット』紙の記事に関して、ベケット会長からの書簡が読み上げられた。この案件は次回会議に持ち越された。

1937年1月16日の評議会では、保全委員会委員長エジャートンは委員会報告書の提出に先立って、戴冠記念植樹委員会の会合に出席したことに言及し、SSDも同委員会に代表を送ることを提案した。議長のペイトリー大佐は見解を述べ、何らかの行動を起こす前にこの件は十分に調査されるべきだとした。

続いてスマスはいくつかのランプリングクラブを勧誘してSSDの関連団体にすることを提案した。書記長が「ランプリングクラブ連盟Federation of Rambling Clubs」に書簡を送り、クラブの名称と連絡先を照会するということで了承された。

1937年4月3日の年次総会では、カード会員はシーフォード・ヘッドの保全に関連して見解を述べ、SSDの目的はフットパスの保全にあるが、フットパスは人々の手(原文ではthe public)から失われる危機に瀕しているとした。

同年12月4日の評議会において、ポーツマスのコール会員よりの書簡が読み上げられた。内容は、ポーツマス付近の使われなくなったフットパスやフットパスの障害物についてSSDに疑問点がある場合には、喜んで地元ランプリングクラブ連盟にその疑問点を照会するというものだった。

次に、マンチェスターのヘンリー・ブラウンからの書簡が読まれた。サセックスにおける協同の社会史を執筆中だが、そこで言及すべき内容を含んでいると思われるので、SSDの報告書を一部所望する、というものだった。

さらに書記長がSSDとナショナル・トラストとの間で最近発生した書簡のやりとりについて説明した。『ワーキング・ヘラルド』紙に掲載された投書がきっかけで、ハイダウン・ヒルの保全に関連するものだった。

また、書記長は『カントリー・ライフ』誌の編集長に同誌掲載の記事に対する反論として書簡を送ったと報告した。同記事は、サセックス・ダウズメンの使われなくなった馬道について、イーストボーンへの100マイル乗馬道を利用した人々からの苦情が同誌に相次いでいるとして、単一の協会

(コモンズ・アンド・フットパス協会) がサセックス・ダウンズのような地域を継続して監視することは出来ないと主張していた。この記事に対する書記長からの反論 (SSDの活動を紹介したと思われる) に対して同誌編集長から、先の指摘には意図せざるところが含まれてしまったとの返信があった。評議会としてはこの謝罪を受け入れるが、同様な指摘が同誌の次号にてなされるべきであると考えるという点で了承された。

ついで議長はデイルパーク・エステイトおよびフェアマイル・ボトムについて地主のハードウィック卿とナショナル・トラストのマシーソンとの三者間で持たれた話し合いについて述べた。フェアマイル・ボトムにおいて散策者による破壊行為が発生したため、ハードウィック卿が同地を国民 (原文はthe Nation) に譲渡する考えを議長のペイトリー大佐に示したことから開かれたこの話し合いにおいて、ペイトリーは仮にフェアマイル・ボトムが人々 (原文はthe public) に譲渡されるのならば「サウス・ダウンズ保全トラスト」こそがその引き受け先としてふさわしいと主張した。しかしハードウィック卿はナショナル・トラストの意見も求めた結果、ペイトリー大佐とマシーソンとでどちらが最終的に同地を信託されるかの決定を両者自身に委ねてしまった。

その後、再度の話し合いがペイトリー、クック、マシーソン、ホーン (ナショナル・トラストの顧問弁護士) によりナショナル・トラストのロンドン事務所で行われた。席上、ペイトリーは過去に両トラストの間で協力関係がなかったことについて見解を述べ、将来的にはより良い合意がなされることを望むと述べた後、ナショナル・トラストが現在保有しているダウンランドの土地の管理をすべてSSDの手に委ねたらどうかと示唆した。これを受けてマシーソンとホーンはペイトリーの提案をナショナル・トラストの次回の委員会に掛けることで合意した。ペイトリーは評議会に対して、以降の詳細はナショナル・トラストの決定が伝わり次第報告すると述べ、評議会はペイトリーとクックがこの件で起こした行動を支持することで了承した。

次に特別保安隊の結成計画に議題が移った。ダウンズにおけるゴミ問題の増加により、州警察本部長がパウエル・エドワーズ少佐の勧めでSSDにアプローチし、自動車とゴミの阻止および野鳥の保護について支援を要請した。このような数多くの苦情に対応するには警察官50人の増員が必要となるが、イースト・サセックス州議会はこれを認めないと見られる。議長

が州警察本部長にダウンズの監視について助力を申し出たところ、本部長はSSDの手で特別保安隊を結成してくれれば、任命をした上ですべての職務権限を委ねることを示唆した。議長はもしこの計画が実現を見た場合には二人の地区責任者が協同して違反者を通報するようにしたいと述べた。

この隊は30人で構成される。この計画の概略をすべての地区責任者に回覧したところ、数人から返答があったと報告された。

1938年4月9日の評議会では、フェアマイル・ボトム問題に関してナショナル・トラストから議長が受け取った書簡によれば、ナショナル・トラスト側はこの問題について、自分たちの側だけに対処中とのことで、議長は正確には何が進行中なのかハードウィック卿に問い合わせるとした。

つぎに、SSDのシーフォード支部について、いまや事実上存在していないので完全に抹消するべきという提案がなされた承された。

翌月の5月21日の評議会においてはノーフォーク公爵からの書簡が読まれた。SSDの副会長に就任しても良いとの文面で、公爵を名誉終身会員に提案する案については会則を変更して評議会にその権限を付与することが必要になるため見送られたが、名誉会員に推挙することが全会一致で了承された。

また、従来は保全委員会が行っていた仕事を本部に吸収することが了承された。会長と議長にとっては、SSDは保全活動に関して他の協会の侵食によりその「地歩を失い」つつあるように感じられるという見解を議長が述べた。

つぎに、ダウンランドのパトロールについて州警察本部長から議長にもたらされた情報では、特別保安隊が任命されるのは全任務向けのみということであった。すなわち二つのカテゴリーが存在し、カテゴリーAは訓練および治安維持業務一般、カテゴリーBは特別任務なしで国家的危機の際に必要なに応じて召集される。全男性会員に回覧して参加を募ることが了承された。

1938年11月26日の評議会では、1番地区担当の責任者ワイルドがハーディング司祭その他の協力を得て同地区のすべてのフットパスの完全な一覧をまとめ上げたと言及し、議長より報告があり、ワイルドは顕彰されるべしとの見解を述べた。

1939年4月29日の年次総会において、ベケット会長は演説の中で、ワーキングのダウンランド買い取りについて言及した。SSDからの度重なる圧

力によりワーキング市はハイ・ソルヴィントンのダウンランド59.5エーカーを保護指定し、建売業者の手から土地を守った。またワーキング市自身が土地を買い取ったことも判明した。会長はこの土地の保全のためにかくも多額のお金を募った功績でナンシー・プライスを称えたが、同時に警告して、この手法はきわめて危険であり、SSDが行っている善の多くを台無しにする恐れがある。人々の寄付に頼るのは保全の理想的な手段ではない、というのは地価の高騰を招きやすいからである。SDDの手法は都市計画法の範囲内にあるべきで、この法律の存在目的であるところの可能な限り十全な保全を目指して邁進することであると述べた。

1939年の5月13日の評議会においては、プライトンの都市計画が話題になった。この計画の持つ脅威をカミンズが指摘したが、議長のペイトリーはその脅威は無視できるほど小さい、なぜなら万が一プライトン市がこれを実行に移そうとすればSSDだけでなく全イングランドが雄叫びを上げてこの有名な景勝地を護らんとするだろうからだと述べた。

つぎにウォルター・ブッチャー夫人からの書簡が読まれ、内容はハイダウン・ヒルの有給の監視人が留守の際にパトロールをSSDに手伝って欲しいというものだった。ハイダウン・ヒルはダウンランドではないが、書記長がボランティアを募ることになった。

次にBBCからの取材の申しこみの書簡が読まれた。録音車を派遣して地区責任者と一般の人との会話を録音したい、その模様は5月25日の国内ニュース番組で放送されるとの内容であった。

ペイトリー大佐はN・C・スミスと電話で話し合い、ブリジャー不動産からショーラム市評議会に所有権が移転した土地について、ナショナル・トラストに委ねる案もあったが同評議会の一部で反対があったことから、スミスはサウス・ダウンズ保全トラストに委託してもらったかどうかと示唆した。

まとめ

この時期の大きな出来事は第一にSSD自身のトラストであるサウス・ダウンズ保全トラストの設立であろう。このことでナショナル・トラストとは何度も利害が対立し、土地の委託をめぐる輻当てのようなことも起き

た。

第二に上記とも関連するが外部の諸団体との親密な交流である。コモンズ・アンド・フットパス協会やイングランド田園保護協会などのロンドンを拠点とする組織からサウス・ダウンズ保全のための提案を受けたり、また地元のイースト・サセックス州警察と協力して一帯のパトロールにあたる計画があったりした。

第三に協会内のランプリング活動の終息である。1931年までの段階ですでに参加者の減少に苦しんでいたランプリング・セクションではあったが³、ここにきて正式に活動を終結することになった。とはいえ、これはランプリングが衰退したことを意味するのではなく、むしろ逆にその人気が高まったため、特にSSD内で主催する必要がなくなったものと考えられる。

注

1. Peter Brandon, *The South Downs* (Chichester, 1998), xv.
2. 本稿の史料は英国イースト・サセックス州文書館 (East Sussex Record Office) 所蔵の「サセックス・ダウンズメン協会運営委員会議事録 (The Minutes of the Executive Committee of the Society of Sussex Downsmen)」およびそれに添付された書簡や文書である (整理番号ACC6849)。なお、SSDは現在では「サウス・ダウンズ協会 (South Downs Society)」という名称になっている。
3. 坂梨健史郎「サセックス・ダウンズメン協会 (The Society of Sussex Downsmen) の活動: 1924-1931」埼玉工業大学紀要No.24 2006, p.15.